

博物館 NEWS

ニュース



イケマの花で吸蜜するアサギマダラ（石鎚山）

アサギマダラは、日本本土に生息する唯一のマダラチョウ科のチョウです。このチョウは春には南から九州や本州へ、そして秋には本州や四国などから南西諸島などへと下っていきます。

夏は1000mを越える高い山で過ごし、イケマやナンゴククガイソウ、ヒヨドリバナ類などいろいろな花に群がっているのが観察されます。

今年は、台湾でマークされた個体が、鹿児島県と滋賀県で再捕獲され、国境を越えて移動をするこ

とがはっきりして、話題になりました。

当然、秋に南下する個体もこれまでのように南西諸島だけでなく、台湾での調査も待たれるところですが、実際にはもっと南の地域まで移動している可能性は高く、東南アジアや中国大陸の南部などでのマーキング調査が必要になってくると思われます。

いったいこのチョウはどこから来て、どこへ行くようとしているのでしょうか。（大原賢二）

アサギマダラと四国

大原 賢二

アサギマダラはふしぎなチョウです。本州の太平洋岸や、九州、四国の海岸部では食草である常緑のキジョランでちゃんと幼虫で冬を越せるのに、春は南から北へ、秋には南へと日本列島を行き来しています。なぜそのようなことをする必要があるのかはまだはっきりとはわかっていませんが、とにかく季節による長距離移動(渡り)をする日本で唯一のチョウであることは間違いありません。

マダラチョウ科のチョウは日本には6種分布していますが、ほとんどは南西諸島だけに見られ、日本本土まで土着しているのはアサギマダラだけです。幼虫はガガイモ科のキジョランをおもな食草としていますが、夏には西日本の方ではカモメヅルやオオカモメヅル、ツクシガシワなど山地に多く見られるガガイモ科の植物を食べて1-2回の発生をすと思われ、夏の間には個体数を増やします。

このチョウは、少し前までは「平地では5月ごろに成虫が現れ、夏は平地では見られず、山地へ集まる。そして、秋になると再び平地に見られるようになり、冬でも枯れないキジョランだけで幼虫越冬をする」と考えられていました。

ところが、沖縄本島でこのチョウの観察をした人が、四月の中下旬ころと秋の10-11月ころのある日、突然ものすごい数のアサギマダラが現れ、2-3日するとまったく見られなくなる。その後、食草を探しても卵も幼虫も見られない・・・沖縄で見られるアサギマダラは、集団で移動する途中に立ち寄りだけではないだろうか、と考えはじめたのです。

1980年から鹿児島昆虫同好会を始め、全国の有志の方々によって、ハネに油性ペンでマークをつけて放し、次にそのチョウが見つかったところとを結んで移動経路を調べようという調査が行われました。いまではこのチョウが春と秋に北へ、南へという季節を変えた移動をしていることがはっきりしています。このことは、いままでに何度か紹介しました(本誌18号、1995年など)。

では、アサギマダラにとって、四国がどのような位置にあるのかという問題について考えようとしても情報が非常に少なく、特に徳島県に関する記録は一件もありませんでした。それどころか5年前は、奈良県でマークされた個体が室戸岬で再捕獲されたという記録が一件あるだけにすぎなかったのです。

四国のアサギマダラに関する情報はここ2-3年、少しずつ増え始めています。特に秋になると室戸岬には、アサギマダラが非常にたくさん集まっています、これらの中には本州の各地で夏にマークされたものがいくつも含まれているのです。滋賀県や奈良県、和歌山県、山梨県、群馬県などから飛んできています。また、去年は室戸岬でマークをつけられた個体が、鹿児島県の種子島や与論島、沖縄県の宮古島などで再発見され、室戸岬が四国の出発地になっている可能性が非常に高くなってきました。しかし、このチョウはこの室戸岬までどのようにして来るのかとなると徳島県を調べないわけにはいかないのです。というのは、室戸岬とそこで再捕獲された個体の出発地を結び、ほとんどすべての個体が徳島県の上を通過したということになってきます。はたして徳島県は通過するの、あるいは徳島県のあちこちにも寄りながら、次第に移動していき、最後に室戸岬に集まって、そこから風を見ながら海上へと出るのか、どうしてもこのチョウにとっての徳島県の意味を知りたいと考えていました。

徳島県と近畿地方の地図を見てみると、まず目につくのが、最近本州とつながった淡路一鳴門を結ぶ線です。これは滋賀県や京都府、大阪府などからこの方向で四国へ渡り、室戸あたりに集まる・・・というコースを想定できます。もう一つは、本州のかなり東側から太平洋沿岸を少しずつ西へ移動し、紀伊半島の中中部や南部に集まってきて、そこから西を目指すコースです。和歌山県か徳島県の阿南

市や由岐町などの海岸を目指すこととなります。もちろん、紀伊半島から直接南西方向を目指して海上へ出るものもいるかもしれません。

一昨年からは重点的に調査を行う場所を決めました。淡路ー鳴門ルートで来るとすれば、鳴門の山になります。そこで、撫養町の妙見山やその周辺の山にねらいを絞りましたが、残念ながら昨年は再捕獲記録は出ませんでした。もちろん鳴門だけでなく、徳島市内の眉山や、佐那河内村の大川原高原も調査地点にしました。もう一つの紀伊水道ルートの調査ポイントは、まず一番東に伸びだしている阿南市蒲生田岬でした。しかし、ここには秋にアサギマダラが好むヒヨドリバナ類やアザミの花がほとんどなく、もう少し内陸側の明神山に決めました。ここは阿南市と由岐町の境になります。

今年はこのチョウを調べてくださる協力者も増え、今年こそ再捕獲記録を・・・と秋の南下の時期を待ちました。

9月21日、私が佐那河内村の大川原高原にチツゼミの調査に行った帰りに、「MG180 BV」というマークが付けられた個体を捕獲しました。この個体が8月4日に滋賀県のビワ湖バレイで大阪の箕面学園の柳川可奈絵さんによってマークされたものとわかりました。約200kmを移動してきたこととなります(矢印1)。また、10月4日に、鳴門市の妙見山で小学3年生の円藤祐輔君によって、ビワ湖バレイのすぐ近くの比良山スキー場でマークされた個体が再捕獲されました(矢印2)。翌5日には阿南市～由岐町の明神山で、神野清司さんが「大久1311」という記号の書かれた個体を見つけ、写真を写されました。これもビワ湖バレイからの飛来個体でした(矢印3)。これで淡路ー鳴門ルートの方はある程度確実といえそうな気がしてきまし



滋賀県ビワ湖バレイでマークされ、徳島県佐那河内村大川原高原で再捕獲された個体

た。そして、第2のルートとして予想した紀伊水道ルートですが、こちらも10月17日の午前中、同じく明神山で神野清司さんが「10.9, ツノ, 日-27」という記号の付いた個体を再捕獲され、写真撮影後また放したということで、和歌山県日高郡日高町西山でマークされたものと判明しました(矢印4)。これで和歌山からも来るのがハッキリしたと大喜びしましたが、さらに同日の午後、阿南市の大角京子さんが明神山に行かれ、そこで「西山 P-372, 10.16, 和 西山」と書かれた個体を再捕獲されました。これはその前日、同じ和歌山県の西山で京都の藤井恒さんによってマークされたものであり、わずか一日で海峡を越えたこととなります(矢印5)。こうなると和歌山から西へ移動する個体の多くは、海峡を越えて徳島に上陸し、いろいろな花で吸蜜しながら室戸方面へ移動していくのであろうということが考えられます。

そして、その確認もできました。10月9日に明神山で大角京子さん、龍君親子がマークして放した個体を、10月22日に室戸岬で、京都から調査に行かれた藤井恒さんが再捕獲されたのです(矢印6)。これで紀伊半島から阿南市あたりに上陸し、少しずつ移動しながら室戸岬付近に集まり、室戸岬や足摺岬などから海へ出ていくという流れがあると考えて間違いないと確信を持ってました。

このちいさなチョウたちが、遙か海の彼方へと飛び出すきっかけは何なのでしょう？そしてどこまで行くのでしょうか？・・・まだまだナゾの多いこのアサギマダラ、皆さんもこのチョウたちのナゾに挑戦してみてくださいはいかがでしょうか。

(自然課長：動物担当)



2000年秋の徳島県での再捕獲、及び移動を示した図

地蔵院古墳—巨石で築いた石室—

徳島市の中心部から国道192号線を西へ進み、鮎喰橋の1つ手前の信号を左に折れ、県道鮎喰・新浜線を真っ直ぐ南へ向かい、眉山の山麓に突きあたると右手に大きな地蔵院池があります。池のすぐ南側には、真言宗の地蔵院という寺があります。この寺は古くから安産祈願で有名な寺です。この寺の山門をくぐって境内に入ると、すぐ左側に丸く小高く盛り上がったところがあります。ここが、地蔵院古墳です。所在地は、徳島市名東町1丁目になります。

徳島県内では、500基以上の古墳があるといわれています。最も古い古墳は、今年発掘されて話題を呼んだ鳴門市大麻町にある西山谷2号古墳で、3世紀中頃に造られたと考えられています。そして、最も新しい古墳、つまり古墳時代最後の古墳がこの地蔵院古墳ではないかと考えられています。この古墳が造られたのは7世紀前半と思われる。

地蔵院古墳の大きさは直径16m、高さ3.5mで、丸く土を盛って造った円墳です。

古墳の南側に回って見ましょう。大きな石を積み上げた石室が、ポッカリ口を開けています。大人が立ったまま入れる高さです。入口から少し進むと、格子戸があります。この格子戸は後で付けられたものですが、その位置をよく観察すると左右の壁がここでせり出して狭くなっています。この場所は玄門部と呼び、羨道と呼ぶ石室の入口部分と奥の死者を安置する玄室とを分ける境にあたります。埋葬が終わると、この部分に石を積み上げたり、石や木の板でここを塞ぎます。



図1 地蔵院古墳（右手）

格子戸から中は暗くてよく見えませんが、しばらくすると目が慣れてうっすらと見えるようになります。懐中電灯を



図2 石室入口

持っていくとよいでしょう。左右の壁を見ると、大きな石が2段に垂直に積み上げられています。奥の壁を見ると、1枚の大きな石が立っています。天井を見ると、3枚の石が水平に置かれています。玄室の大きさを測って見ると、長さ4.3m、幅2.2m、高さ2mもありました。2:1:1の比率で計画的に造られているのがわかります。

この部屋には木棺に納めた死者を安置し、さまざまな品を供えます。このような石室の場合は、1人だけを埋葬するのではなく、1家族いっしょに葬るお墓です。2世代・3世代を葬った場合もあります。

この石室のように横側から出入りできる構造の石室を横穴式石室と呼んでいます。5世紀頃、朝鮮半島から北部九州に伝わったもので、近畿地方へと広がって行きました。徳島で横穴式石室が造られるようになったのは遅く、6世紀に入ってからのことです。地蔵院古墳の場合は、古くから出入りできる状態になっていたらしく、副葬品など伝わっていません。これほど大きな石ばかりを使って築いた古墳は、県内には見あたりません。

地蔵院古墳の周りには、たくさんの古墳があります。地蔵院池の東側、道沿いに1枚の大きな岩が立っていますが、これも横穴式石室の一部です。また、地蔵院古墳の西側の尾根には節句山古墳の石棺が見えます。地蔵院の南側山腹にはゴルフ場がありますが、クラブハウスのすぐ南に八人塚と呼ぶ積石塚の前方後円墳もあります。地蔵院古墳へは、徳島市バス地蔵院行きを利用すると便利です。（館長：天羽利夫）

新町橋が生まれ変わった

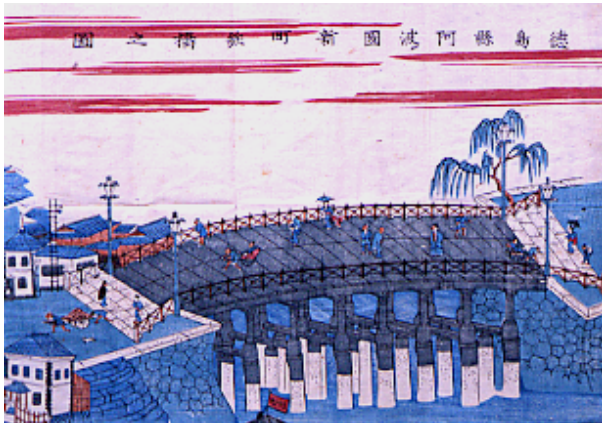


図1 「徳島阿波国新町鉄橋之図」
(1880年5月30日発行) 当館蔵

1880年(明治13)、旧徳島城下の新町橋が木の橋から、鉄の橋に生まれ変わりました。従来の橋は、木の橋であったため洪水のたびに破損し、1736年(元文元)以前は、徳川幕府の許可を得て、たびたび大工事をしなければなりませんでした。新町橋は旧城下の「内の町」と「外の町」とを結ぶ交通の要所でした。しかもこの橋の付近は、商業の中心地であったため、徳島で最初の鉄の橋に架け替えられました。新装なった直後の新町橋を描いた版画(図1)によれば、堅牢な橋の上を行き交う人びとやその周辺の賑わいぶりが描かれています。また、橋が新装なった頃は、文明開化の波が徳島にも押し寄せており、版画から洋風建築や人力車などの急速な普及がうかがわれます。

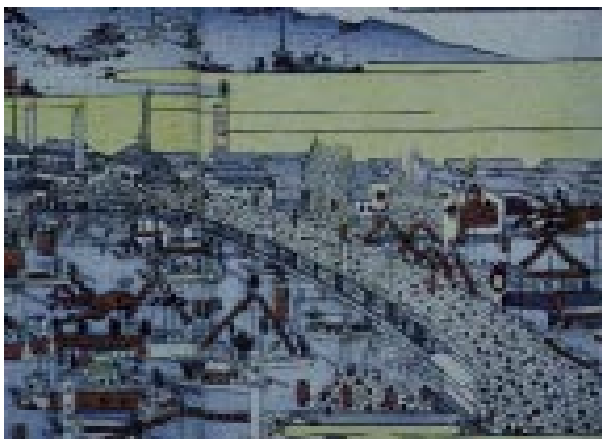


図2 「徳島天神夏祭賑ノ図」(徳島新聞社『写真集・徳島100年』上巻、1980年より)

橋は大阪砲兵工廠で鑄造された鉄の橋材が使用され、長さ29間余り(約53)、幅4間余り(約7.3)で、夜間には南北の橋詰めに設置された4基のガス灯に火が灯りました。夏の夜、人びとは、新町川の清流に映る美しい橋の影を楽しんだことと思われます。建築費は13,278円余り(『徳島市史』第3巻)で、現在の価格に換算して、約4億6,000万円余り(明治15年の警察官給与より算定)に相当する膨大な費用でした。

新装なった新町橋は、その後、徳島市民に親しまれ、新たな憩いの場所となりました。1897年(明治30)頃の天神祭りの賑わいを描いた版画(図2)によれば、この橋の南に続く天神社の夏祭り、橋上は新町川を渡御する御輿の見物者で埋め尽くされています。また、徳島に住んだポルトガル人・文豪モラエスもこの橋に親しみ、「新町橋は、この土地のしゃれた場所なのだ。夏の夜、誰もが橋の上に涼みに来る。ぼくもだ。そして、しょっちゅうこの場所を通る」と、祖国・ポルトガルに書き送っています(岡村多希子訳『モラエスの絵葉書書簡』)。

ガス灯に火が灯り、徳島市民に長く親しまれた新町橋は、1945年(昭和20)7月4日、徳島大空襲で焼け落ちてしまいました。まもなく橋は復旧されましたが、1978年(昭和53)、明治の古い橋脚は撤去され、現在の新町橋に架け替えられました。(歴史担当：山川浩實)



図3 モラエスが親しんだ昭和初期頃の新町橋
(前掲『写真集・徳島100年』より)

館蔵品紹介

そう 箏 めい きゅうこう 銘 九江 いしむらいなば 石村因幡作 いいづかとうよう 飯塚桃葉蒔絵

最近当館に収蔵された楽器の箏です。内面には「元禄五年 / 壬 / 柏屋 / 石村因幡掾藤原義久作 / 申 / 正月吉日」の墨書があり、制作年と作者が知られます。元禄5年は1692年にあたり、石村因幡掾藤原義久は、京都に住んでいた琴三味線師です。

箏の頭と尻のところ（竜頭・竜尾）、側面の細長いところ（磯）などは、象牙で縁どり、木画で幾何模様をあらわしています（図2）。木画とは黒檀、紫檀、象牙、染角などの切片を貼り寄せる寄せ木細工のような装飾法で、江戸時代の箏にときどき見られますが、現在では技法が絶えています。

側面の、細長い磯と呼ばれる部分には瀟湘八景図（図4、5）が、その他の部分には群千鳥、貝散らしなどが蒔絵されています。瀟湘八景とは、中国湖南省にある名勝地の8つの風景で、昔からよく絵に描かれました。八景図の画面の初めには「天明二壬寅九月日 / 観松齋桃葉花押」（図3）、終わりには「観松齋 / 知足花押」の銘があります。天明2年は1782年にあたりますので、90年前に作られた古い箏を修理し、蒔絵をやりなおしたと想像されます。

観松齋桃葉とは、蒔絵師飯塚桃葉のことで、彼は1764年（宝暦14）に阿波徳島の藩主蜂須賀重喜に抱えられました。藩主の命令で料紙硯箱、印籠、鞍鐙、太刀の鞘、琴の爪などさまざまな道具に蒔絵をほどこし、1790年（寛政2）に没しました。子孫も代々蒔絵師として藩に仕えています。

戦後、桃葉が蒔絵をした箏が蜂須賀家から出たという話は、同家に関係した古美術商から一部に伝わっていました。しかしその方もいまは亡く、確認することはできません。この箏も伝来は不明ですが、瀟湘八景図を見るかぎり、飯塚桃葉の作として納得できる出来ばえをしめしているように思います。

なおこの箏には、本体を入れる外箱のほかに箏柱、爪、爪箱、用途不明の小箱がついています。爪には、蜂須賀家の家紋である左卍紋や梅の枝、落葉などが蒔絵されています。用途不明の小箱は、爪を携帯するための箱かと思われますがはっきりしません。これには左卍紋と松の木が蒔絵されており、2代目以後といわれている観松齋の銘が入っています。

（美術工芸担当：大橋俊雄）



図1 全体

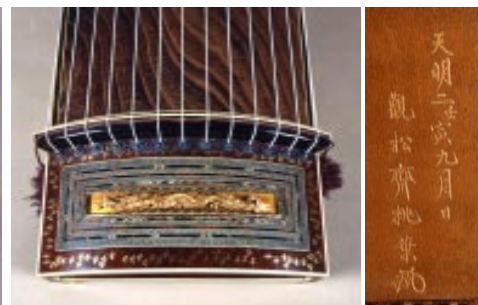


図2 竜頭

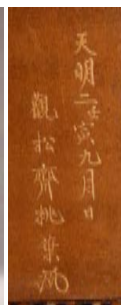


図3 銘



図4 側面 瀟湘八景図（漁村夕照の一部）



図5 側面 瀟湘八景図（山市晴嵐）

Q & A 白花のホトケノザはめずらしいですか？

真っ白いホトケノザ！とってもきれいですね（図1）。ホトケノザは畑の縁や田んぼのあぜなどにごく普通に見られるシソ科の植物で、通常は赤



図1 花の白いホトケノザ

紫色の花をしています。

この白いホトケノザは徳島市内の小学生が持ってきてくれました。質問はこんなのを見つけたが珍しいですか？というもの。私もこれまでに一度も白花のホトケノザは見たことがありませんでしたし、そんな話も聞いたことがありませんでした。そこで、博物館の標本を調べてみると、たった一枚だけ海部郡由岐町で採られたものがありました。比較的珍しいものようです。



図2 白花のキツネノマゴ

花の色はいろいろな色素で決まっており、特に紫系の色はアントシアニンなどの色素が関係しています。きっと、この個体ではそれが何らかの理由で無くなってしまったのでしょう。

このような質問がなければ、たとえ野山でホトケノザを見つけても、何気なく見過ごしていたかもしれませんが、このことがあってから私も身の回りのホトケノザを注意して観察するようになりました。

けれども、探してみるとなかなか白花のホトケノザは見つかりません。そんなある日、阿南市の畑の中を歩いていると草むらの中に白い花を見つけました。その時は、「とうとう白花のホトケノザを見つけたぞ！」と思いましたがよく見るとそれはホトケノザではなくキツネノマゴ（図2）。

キツネノマゴは花こそホトケノザに似ていますが、オオイヌノフグリなどに近いゴマノハグサ科の植物です。ホトケノザはシソ科でシソやハッカのなかま。ちなみに春の七草で言うホトケノザはキク科のコオニタビラコ（図3）のことで、ここで言うホトケノザとはちがい、タンポポなどに近いものです。

あーあ、残念。せっかく見つけたと思ったのに……。こんな訳で、とうとう私は白花のホトケノザを見つけることができませんでしたが、みなさんはどこかで見かけたことはありませんか？

もしどこかで白花のホトケノザや、その他にもいろいろなおもしろい草花を見つけたら、ぜひ私にも教えてください。（植物担当：茨木 靖）

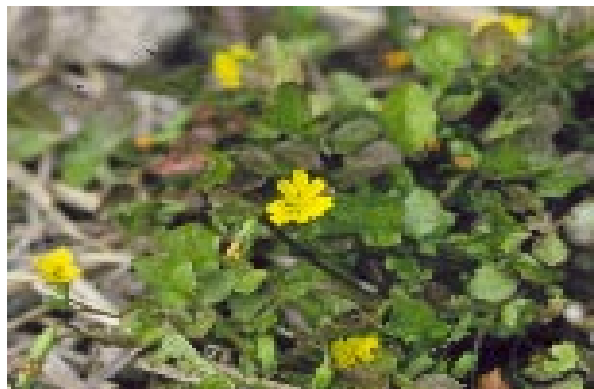


図3 コオニタビラコ

1月から3月までの博物館普及行事

あなたも参加して見ませんか？

シリーズ	行 事 名	実 施 日	実施時間	対 象 (人 数)
土 曜 講 座	おこめのなかま	1月13日(土)	14:00~15:00	小学生から一般(50名) 1
	生きものの名前	2月10日(土)	14:00~15:00	小学生から一般(50名) 1
	鳴門海峡海底のナウマンゾウ化石	3月10日(土)	14:00~15:00	小学生から一般(50名) 1
室 内 実 習	岩石薄片標本をつくろう	1月14日(日)	13:00~16:30	中学生以上 (20名) 2
	博物館をたんけんしよう	1月21日(日)	13:00~15:30	小学生から一般(20名) 2
	落ち葉の中のいきものたち	1月28日(日)	14:00~16:00	小学生から一般(40名) 2
	おかずの博物館学実習編	2月18日(日)	14:00~16:00	小学生から一般(40名) 2
	レプリカづくり!(型どり)	3月4日(日)	13:00~16:00	レプリカづくり"とセット 2 両方参加可能者のみ(30名)
	レプリカづくり"(色つけ)	3月11日(日)	13:00~16:00	レプリカづくり!の参加者
歴 史 散 歩	古墳見学"	2月11日(日)	13:30~16:30	鳴門市大麻町 小学生から一般(30名) 2
	国府町史跡ウォーク	3月18日(日)	10:00~14:00	徳島市国府町 小学生から一般(20名) 2
体 験 学 習	わらじをつくろう	2月25日(日)	13:00~16:00	小学生から一般(40名) 2
移 動 講 座	考古学から魏志倭人伝を読む!	1月21日(日)	14:00~16:00	海南町立博物館共催(100名)
	考古学から魏志倭人伝を読む"	2月18日(日)	14:00~16:00	海南町立博物館共催(100名)
	考古学から魏志倭人伝を読む#	3月18日(日)	14:00~16:00	海南町立博物館共催(100名)
ミュージアムトーク	続・中世説話を読む!	1月27日(土)	14:00~15:30	3回シリーズ, 3回連続出席可能者のみ(15名)
	続・中世説話を読む"	2月24日(土)	14:00~15:30	続・中世説話を読む!の参加者
	続・中世説話を読む#	3月24日(土)	14:00~15:30	続・中世説話を読む!の参加者

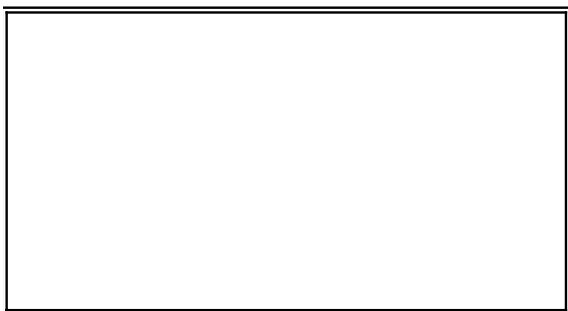
1は、申し込み不要です。その他は、往復はがきでお申し込みください。(各行事の1カ月前から10日前までに届くように)

2は、小学生の場合保護者同伴。

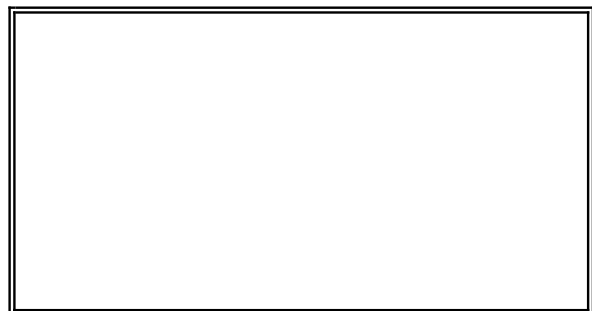
くわしいことは博物館にお問い合わせください。

博物館開館10周年記念行事を振り返って

博物館開館10周年記念行事は「こどもの日フェスティバル」と「写生大会」を実施いたしました。こどもの日フェスティバルは5月5日に行い、1762名の参加者が昔の衣装を着たり、恐竜などのおりがみをおって、楽しい体験学習をしていただきました。また写生大会は11月3日~5日に行い、名の参加者が、常設展の色々な場所で思い存分描いていました。



こどもの日フェスティバルのようす



写生大会のようす

博物館ニュース No.41

発行年月日 2000年12月1日

編集・発行 徳島県立博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山 TEL 088-668-3636

<http://www.museum.comet.go.jp>